

三宅秀による「水泳」に関する懇談

頼住 一昭

愛知教育大学保健体育講座

A Study of Hiidsu Miyake's Talk at the “Swimming”

Kazuaki YORIZUMI

Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education.

キーワード：三宅秀, 水泳, 講道館.

Key Words : Hiidsu Miyake, Swimming, Kodokan.

はじめに

三宅秀 (1848-1938) は、東京大学初代医学部長 (1881-1890) をはじめ、帝国大学医科大学長 (1886-1890)、1888年の学位令制定では日本初の医学博士、さらには1903年において東京帝国大学最初の名誉教授となるなど医学者としての最高の名誉職を擔う^{注1)}。

そんな彼は、近代医学教育の普及と発展に尽力するとともに、各地で行われた講演などを通して、当時の日本人の健康および身体教育についてその改善を指摘し説論している。

彼のそれらの知見は、衛生、服装、女子教育、武道、海外のスポーツ事情など多岐にわたっている^{1)・2)}。

しかしながら、これまでの先行研究では三宅と「水泳」に関するものは見当たらない^{注2)}。

そこで、本稿では近代日本の医学教育の基礎づくりに尽力した三宅による講演活動、なかでも「水泳」に関する懇談について取り上げ、当時、医学界の重鎮であった三宅が医学者の立場から「水泳」に対してどのような考えを示していたのか、そして、医学的立場から当時のそれらの状況にどのようなことを指摘し説論していたかを明らかにすることを目的とした。

その手がかりは、これまでに体育・スポーツ史研究分野では明らかにされていない三宅自身が用いた「自筆講演用メモ」³⁾からその考察を試みた。

ここでいう「自筆講演用メモ」とは、三宅が講演を行う際に持参していた自筆のメモである。彼はこのメモを持ち、読み上げていたという。

それはともかく、「自筆講演用メモ」に記された三宅による「水泳」についての考え方についての考察は別稿に期すこととし、本稿では三宅が懇談にあたってあらかじめ準備していた「水泳」についての内容とはいかなるものであり、どのようなことを指摘し説論しようとしていたかについてその全容を明らかにすることである。

本論

1. 「講道館講話」における「水泳」について

三宅が用いた「自筆講演用メモ」にはその末尾において「講道館講話」と明記されている。したがって、この講話は講道館で行われたものであることが確認できる^{注3)}。

しかしながら、講話の年月日、さらには、どのような経緯によりこの講話が行われたかについての記載はなく詳細は不明である^{注4)}。

以下、「講道館講話」の全文を明らかにする^{注5)}。
(原文縦書き)

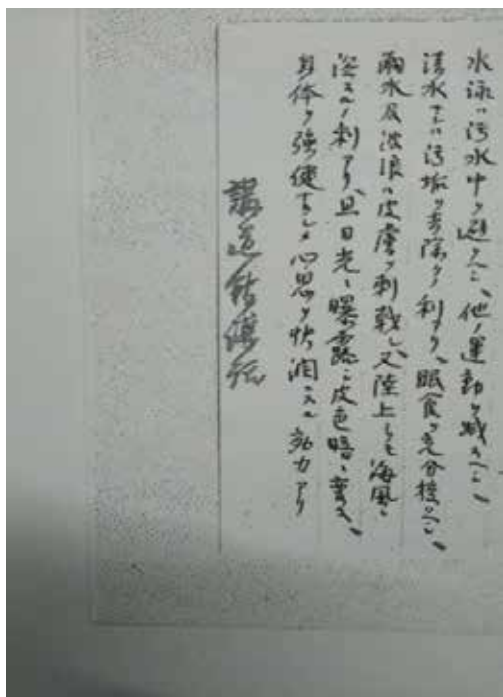


写真1「講道館講話」の一部（個人蔵）

1

学習院生徒ニ於ケル効力泳者百中病式八人欠二十二日

非泳者百中二三十四人欠三十五日

水泳ノ衛生ハ之カ人体ニ及ホス影響ヲ理学的ニ述ヘン、

水泳ハ体操運動ノ一部ニ属ス、而メ其主ナル部分ハ浮キ、

人体ノ二ハ水ナリ

ト前進トノ二ニアリ、而メ浮キハ自然ニ付キ在ルナリ、人若シ

呼吸シテ肺ヲ空クスレハ比重一・〇五七トナリ、肺ヲ充盈スレハ

蓄息法

平日肺ノ容量ヲ増シ息ヲ続カシムヘシ

○・九六七トナル、故ニ肺ヲ充塞セシメテ仰臥シ流ニ乗スレハ運

動スルヲ要セス、前進センニハ四肢棘幹ヲ使用スル故ニ運動

トシテ最モ強甚ノモノナリトスレバ、氣中ニ於ケル運動トハ全ク異ル

モノニメ、水温ノ関係非常ナレハ単ニ運動ノ強弱、長短ナシナ

ラス水温ノ感作頗ル大ナリ、蓋シ水泳ハ練固法ノ一ナリ

冷水浴ニ馴レシムルノ準備ト心得ヘテ可ナリ、此豫備ハ他ノ

陰囊大ニ冷エルノ説アリ

運動ニテ代リ難シ、水温ハ体温ヲ奪フニ甚シク氣温高ク、

或ハ体温高クシテ水温ト其差大ナルキハ慎マシムヘシ、

水温ハ呼吸ヲ促シ、燃焼ヲ盛ニシ、肥者ハ瘦セ、瘦者ハ肥ユ、

水温ハ皮膚ヲ刺戟シテ温血ヲ皮表ニ輸ス、為ニ心機ヲ

亢盛ニス、故ニ少時ニシテ水ヲ出ツレハ皮膚温ヲ覚フ、入浴ノ後

ニハ寒ヲ覚ヘ戦栗シ、皮色蒼ニシテ、心力減スヘシ、不熟練

壯神養ヲ久服スレハ■シ

ノ者ハ短浴ニテモ之ニ耐ヘサレバ、馴ルレハ悪寒セスメ速ニ復ス」

水泳ノ運動ハ全身ヲ使用ス、足ハ水ヲ踏ミ、手ハ水ヲ抓キ、

首ヲ仰キ、脊柱ヲ反ラシ、背筋ヲ用フルヲ多キヲ以テ姿勢ヲ

正シ、踏躡ヲ治ス、双手ヲ擴ケル為ニ胸腔ヲ廣ケ、呼吸

深息ス、始メ呼吸ヲ急シクスルハ熟練ノ足ラサルヲ示ス、

モノニシテ沈着シテ手ヲ擴ケルキニ吸息シ、体ヲ屈メ肺

ヲ縮ケルキニ呼吸スレハ大ニ呼吸ヲ助クルヲ以テ徒勞

2

維納ノイサセスブ女英ヨリ佛ニ渡ラントス佛ヨリ英ニ向ヒ■ニシテ■ク
 スルヲナシ、然レ任胸腹共ニ水壓ヲ蒙ルヲ以テ他ノ運動ヲ
 為スキヨリモ抗抵多キ故ニ呼吸ニハ強力ヲ要スルナリ、
 水中ニ身ヲ投スレハ全身ニ冷ヲ感シ、心跳頻數トナリ、且■縮
 旺盛シ、心ノ勞作ハ最モ甚シ、若シ急泳長泳或ハ冷水（深
 通）ニ入レハ忽チ心カ減乏ヲ来ス、此時水中ヨリ出ツレハ眼赤
 色ヲ呈シ、皮色蒼白、唇吻青色、呼吸喘急、四肢強直スルヲ
 覺フ、若シ勞度甚シカラサレハ皮膚ヲ乾拭シ摩擦スレハ大

スル為ニ

カヲ復ス、是レ久シク勞作カ敗物血中ヲ汚サル、ニ由ルト雖モ
 久シク持続スレハ脱力ヲ復シ難シ、彼難破船ノキ數時間
 風浪ノ中ニアリテ強ク泳ク者ハ助ケ難シ、心ノ衰フルニ由ル、
 以上ノ理由アルニ依リ食後、飲酒後、長途遠足後、
 心病。脚氣アル者。耳病アル者。眩暈ノ癖アル者。ハ禁ス、
 氣温下水温トノ差甚シキキ、氷冷ノ水ニハ入ルヘカラス、疲勞
 ハ忍フヘカラス、競争ノ結果疲勞スレハ危険多シ、■衛
 ハ早く、疲勞者ヲ発見スルニアリ、若シ之ヲ見レハ速カニ救ク
 フヘシ、又救ヲ呼フヘシ、永泳ニハ板子、浮環ヲ用意スヘシ、
 救急法ハ互ニ平日講究セシムヘシ、水ヲ吐カセ温ヲ与フ
 藥ニハ壯心藥。電氣ヲ供フヘシ、湯茶ノ用意スヘシ、
 水泳ハ汚水中ヲ避クヘシ、他ノ運動ヲ減スヘシ、
 清水ナレハ汚垢ヲ去除クノ利アリ、眠食ヲ充分摂リヘシ、
 潮水及波浪ハ皮膚ヲ刺戟シ、又陸上ニテモ海風ニ
 浴スルノ利アリ、且日光ニ曝露シ皮色暗ニ変ス、
 身体ヲ強健ナラシメ心思ヲ快潤ニスル効力アリ

講道館講話^{注6)}

2. 「家庭父兄懇話會」における「水泳」について

本論における「1」と同様に三宅が用いた「自筆講演用メモ」にはその末尾において「家庭父兄懇話會」と明記されている。したがって、この懇話会は「家庭父兄懇話會」において行われたものであったことが確認できる^{注7)}。

しかしながら、懇話の年月日、さらには、どのような経緯によりこの懇話会が行われたかについての記載はなく詳細は不明である。

以下、「家庭父兄懇話會」の全文を明らかにする^{注8)}。(原文縦書き)

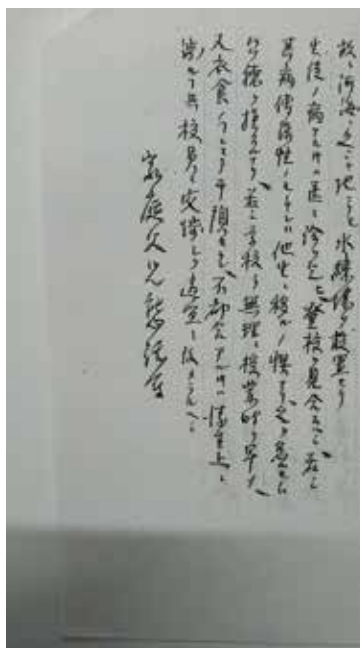


写真2 「自筆講演用メモ」の一部（個人蔵）

1

本會談ノ必要ナルヲ 学校ニテハ三育ノ偏派ナキヲ則トス
 体育ヲ主トシ、智徳ニ育之ニ随ヒ、智ヲ進メ、德育ヲ怠
 レハ体ニ障害ヲ及ホスヲ明カナリ故ニ学校ニ於テハ智
 育ノ進度、德育ノ実践ヲ家庭ニ報スルト、同時ニ身
 体モ共ニ上進セルヲノ報通ヲ怠ルヘカラス、是レ身体檢
 査ノ調査報告是ナリ、学習院ハ毎年衛生状態
 ノ報告ヲ為スナリ、恰モ質屋ノ火際ニ逢ヒシト同一ノ趣ナリ、
 余ハ三十一年ノ春曾テ家庭教育衛生ノ談ヲ為シタリ、
 此理由ハ学校教員モ今日ニテハ学校衛生ニ明ルク、文部
 ノ教育令モ大ニ衛生ヲ省ル処アレト、家庭ニテ其趣ヲ
 了解セサルキハ教員ニテ休業ヲ勸メ、或ハ医療ヲ勸メルキ
 却テ仰山ナリト思ヒテ捨置カル、キハ獨リ一人一家ノ不
 利ナルノミナラス、延テ全校ノ幼童ニ害ヲ及ホサシムルヲアリトス、
 彼ノ傳染病ニ罹レルモノ、前後ノ所置ノ如キハ最モ大切ナリ、
 又学校ニテ用フル■低墨ノ如キモ衛生上眼白ヲ
 害スヘキモノ、如キハ学校ノ拮■ニ随ハサルヲ得ス、又校具
 ノ如キハ余リ多ク携帯スルハ能シカラス、弁当ハ長飯ヲ忌シ
 テ小ナルモノヲ携フルモ食ハ急カスシテ多ク喫セシムヘシ、学校
 ノ方ニテモ冬季ハ凍ラサル招ニ注意スル処モアリト云フ箸茶
 碗ハ自便ヲ良トスレト、是又携帯品ヲ増スノ嫌アリ、
 上草履ハ頗ル固難ノモノナリ、是等ハ何トカ学校ニテ工夫ヲ
 要ス

2

衣食住ハ共ニ家庭ノ預ル処ニテ近頃ハ男女袴ヲ付ケ
 筒袖ヲ用フルヲトナリ、女帯ノ巾廣キト帶上ケノ大ナルモノヲ
 廢スルニ至リシハ悦フヘシ、此運動シ易キ招ニ衣服ヲ裁フハ
 只悪作ヲ奨励スルニハアラス、小兒ハ少時モ静マリテ居ラスモ
 ノナレハ不精ノ癖ヲ付ケス様ニスル為ニシテ必ス薄衣ヲ為
 サシム、運動ヲ為シ疲ルルキハ夜安眠ス、夜着布団ハ薄ク且
 固キヲ良トス、朝モ目醒ムレハ直ニ離■セシムヘシ、去迎早
 起ヲ促スニハアラス、夜食ニ不消化ノ物ヲ食セシムレハ安眠ヲ得
 ス為ニ寢具ヲ弄スルノ惡癖ヲ覺フ、最モ注意スヘキナリ

其二

衣食ハ薄キヲ尚フ、酒煙草ヲ授クヘカラス
 自宅ニテ復修ヲナスハ好マサレ任若シ為スキハ姿勢ニ注意スヘシ、
 運動遊戲ハ余リ抑制セサルヲ良トス、然レ任危険ナル
 玩具ヲ弄シテ怪我スルヲ好トスルハ不適當ナラン、
 個人ヲ苦メルヲ、欺クヲ等ハ嚴戒スヘシトイエ任運動、散歩、等
 ハ大ニ勸ムヘシ
 身体衣服ノ清潔ヲ怠ルヘカラス、水泳ハ清潔、運動、
 強壯法、標技ノ四徳ヲ兼テ、殊ニ海国ノ者ニハ必要アリ、
 故ニ河海ニ乏シキ地ニテモ水練場ヲ設置セリ
 生徒ノ病アルキハ医ニ診テ乞ヒ、登校ヲ見合スヘシ、若シ
 其病傳染性ノモノナレハ他生ニ移ルノ悞アリ、之ヲ怠ルモノハ
 公德ヲ換スルナリ、若シ学校ニテ無理ニ授業時ヲ早メ、
 又衣食ノヲニマテ干預セラレ、不都合アルキハ衛生上ニ
 涉ルヲ其校長ニ交渉シテ適宜ニ改メラルヘシ

家庭父兄懇話會¹¹⁹⁾

おわりに

三宅による「水泳」に関する二つの懇談の全文を明らかにしたわけであるが、彼は衛生ならびに安全管理について、そして、医学者の立場から「水泳」という運動が身体にどのような影響（効用）を及ぼすかについて事例を用いて分かり易く述べている。

例えば、「講道館講話」では水温による体温の変化について、さらには、水泳実施における様々な注意点を詳しく述べている。

なかでも、筆者が特に注目したのは「呼吸シテ肺ヲ空クスレハ比重一・〇五七トナリ、肺ヲ充盈スレハ〇・九六七トナル、故ニ肺ヲ充塞セシメテ仰臥シ流ニ乗スレハ運動スルヲ要セス」という部分である。

近年における人体の浮力に関わる比重についての研究では、「呼気時の比重が1.07前後程度」⁴⁾、「対象者9歳から15歳の男女呼気時：男子1.0014～1.0577、女子1.0013～1.0357。吸気時：男子0.9364～0.9948、女子0.9541～0.9918」⁵⁾、「平均でみれば吸気では0.98程度、呼気で1.03程度」⁶⁾との報告がある。

したがって、三宅が用いた比重に関する当時の数値は今日における研究結果と比較しても同等（範囲内）のものであったといえよう。

一方、「家庭父兄懇話會」では冒頭で三育の観点から「体育ヲ主トシ、智徳ニ育之ニ随ヒ、智ヲ進メ、徳育ヲ怠レハ体ニ障害ヲ及ホスヲ明カナリ故ニ学校ニ於テハ智育ノ進度、徳育ノ実践ヲ家庭ニ報スルト、同時ニ身体モ共ニ上進セルヲノ報通ヲ怠ルヘカラス」と述べ、教育の面からも身体活動（体育）の重要性について述べている。

その中で、「水泳ハ清潔、運動、強壯法、標技ノ四徳ヲ兼テ、殊ニ海国ノ者ニハ必要アリ、故ニ河海ニ乏シキ地ニテモ水練場ヲ設置セリ」と述べ水練場、すなわち、今日におけるプール等の設置について指摘しており、「海国」（日本）にとっての「水泳」の重要性について述べている^{注10)}。

このように、三宅は日本人の健康の保持・増進、さらには、水難から身を守る一つ的手段として「水泳」がいかに重要であるかについて説論している

ことがわかる。

したがって、三宅は「講道館講話」の最後において「水泳」を「身体ヲ強健ナラシメ心思ヲ快潤ニスル効力アリ」とその効用を認め、締め括っている。

以上のことから、三宅は医学界における重鎮でありながらその活躍ぶりは医学教育だけの範疇に止まらず、広い知見から当時の人々に「水泳」の重要性について力を注いでいたことがわかる。

このような医学者三宅の「水泳」に対する考え方は当時の国民に対する健康の保持・増進、さらには近代日本の学校体育の普及と発展にも少なからず影響を与えたのではないかと考えられよう。

したがって、彼のこのような講演活動は、その後の広い意味での日本人の身体形成過程にも影響を与えたと考えられ、それゆえ、当時の体育指導者同様に再評価されるべきであろう。

謝辞

本稿執筆にあたり資料の提供をいただきました三重大学教育学部の水藤弘史先生に深甚なる感謝の意を表します。

注

注1) 三宅秀の功績については以下を参照。

- ・三宅秀, 「履歴書」, 個人蔵。
- ・富士川游, 三宅秀先生小傳先生五七日忌法要に際して, 中外医事新報, 第1255号, pp.1-6, 1938.
- ・東京帝国大学医学部病理学教室五十周年記念会, 東京帝国大学病理学教室五十年史(上巻), pp.46-48, 東京帝国大学医学部病理学教室五十周年記念会, 1939.
- ・村上一郎, 蘭医佐藤泰然その生涯とその一族門流, 房総郷土研究会, pp.206-207, 1941.
- ・三浦義彰, 20世紀のわが同時代人, 千葉医学雑誌, pp.239 - 244, 2000.
- ・日本女子大学編, 日本女子大学学園事典－創立100年の軌跡, p.316, 日本女子大学, 2001.

注2) 筆者のこれまでの調べでは体育・スポーツ史研究分野以外においても取り上げられたこ

とはないと思われる。

注3)「講道館」とは講道館柔道の創始者嘉納治五郎(1860-1938)によって創設されたものと考えてよからう。

三宅と嘉納の関係を示すものとしては以下を参照。

- ・頼住一昭, 三宅秀の柔術観, スポーツ健康科学研究, 第41巻, pp.15-21, 2019.
- ・片桐芳雄, 評伝成瀬仁蔵-女子高等教育から「社会改良」へ-, pp.514-515, 日本女子大学, 2021.

注4) 縦13cm, 横19.5cm, 計2枚, 万年筆で書かれている。

その他の「自筆講演用メモ」と比較すると用紙, 書式, 書体などから明治中頃のものではないかと思われる。

注5) ■印は解読困難な文字を示す。

注6) この部分のみ毛筆でやや大きく書かれている。

注7) 縦13cm, 横20cm, 計2枚, 万年筆で書かれている。

その他の「自筆講演用メモ」と比較すると用紙, 書式, 書体などから明治中頃のものではないかと思われる。

注8) ■印は解読困難な文字を示す。

注9) この部分のみ毛筆でやや大きく書かれている。

注10)「土居陽治郎, 下永田修二, 学校プール建設の歴史と学校体育における水泳教育の変遷, 国際武道大学研究紀要, 第25号, pp.31-41, 2010」によると水泳という運動が学校体育の中で重要な位置づけがなされるようになったのは1968年の学習指導要領改訂時期からであるという。

4) 小林正行, 永田稔, 辻達彦, 人体比重-体脂肪量に関する研究(1) 夏季水泳プール利用による水中体重測定法, 民族衛生, 第45巻第4号, pp.153-161, 1979.

5) 合屋十四秋, 児童・生徒の人体浮力の経年的変化, 愛知教育大学体育教室研究紀要, 第14号, pp.29-34, 1989.

6) 海上保安庁, Water Safety Guide, https://www6.kaiho.mlit.go.jp/watersafety/swimming/07_detailed/ (2022年4月18日閲覧)

(受付2022年4月28日 受理2022年6月22日)

引用文献

- 1) 三宅秀, 「自筆講演用メモ」, 個人蔵.
- 2) 頼住一昭, 近代的身体の形成過程を考えるにあたって-衛生面を強調していた医学者たちの役割-, 日本体育大学父母会奨励研究費研究成果報告書, pp.51-53, 1999.
- 3) 前掲書1)